後期西谷啓治の身体論

——大谷大学講義より——

Keiji Nishitani's Body Theory
—In Otani Lectures in his later years—

小野　真

一、西谷啓治の思想における身体論の意義

西谷啓治は、大谷大学において、第二次世界大戦前に八年間、戦後に三十九年間、講義を行っている。そのうち昭和三十九年から昭和六十一年の講義の多くが『西谷啓治著作集』第二十四巻から第二十六巻にかけて収録されている。その内容は多岐にわたるが、中心になっているのは、彼独自の生命論、およびそれに基づく身体論である。西谷における身体論ないし心身論の重要性について、長谷正當氏は第二十五巻の月報で次のように報告されている。

「意外かもしれないが、それ〈身体の問題〉はまた西谷先生が深くかかわって来られたものであり、「空」についての思索と並んで先生のうちで大きな位置を占めていた問題といえる。（中略）かつて武内義範先生は西谷先生の思想を評して、表に現れているのはごく一部で、その大部分はまだ地下に隠れていたままになっている鉱脈に譬えられて

いたことが思い出される。先生はそのことを一度ならず述べられているから、これは武内先生が西谷先生との長年に亙る接触から直に得られた確信に基づくものであろう。知覚や構想力についての西谷先生の考えはそのような地下に隠されたものの一つといえるが、心身の問題もまたそう言えるのではないか。ただ知覚や構想力の問題はその核心の部分は地下に隠されているものの、その一部は既に早くから地表に姿を表していたが、身体の問題は最近になって漸く『大谷大学講義』において姿を表して来たのである[1]」。

この報告のポイントは、1、身体の問題は、「空」の思想と並ぶ大きな位置を占める問題であること、2、それにもかかわらず、地下に隠れた鉱脈のように姿を表していなかったが、『大谷大学講義』（以下『講義』と表記）において漸く姿を表してきたことの二点であるといえよう。長谷氏の指摘が正しければ、『講義』における身体の問題は、地表に姿を表していた「空」の思想とも深く密接な連関を持っているはずであり、西谷啓治の思想の主導線はもちろんのこと、晩年の彼の思想を総合的に理解するうえで、身体の問題の探求は必要不可欠であるといえる。特に晩年の大きな論文である「空と即」が含み持つ思想には難解な部分が多いが、『講義』における身体の問題の探求を通じて、この論文の理解のためのピースを嵌めこむことができるであろう。

本論は、このような問題意識にたって、『講義』において「漸く姿を表してきた」「身体の問題」とはどのようなものかを明らかにしたうえで、それが西谷において「「空」についての思索」とどのように繋がっているのかを探求してみたい。

二、身体論の鍵概念としての self

『講義』に現われた西谷の身体論の鍵概念は、self（日本語では「それ自身」（24：154）[2]、「自己」（24：391）、「広

い意味の自性」(24:211)、「自」、「自ずから」(24:306)という語に等置される)である。selfとは、大谷大学講義を通じて西谷思想における、「生きている物」の特別な在り方を指すものであり、「生」の概念といってもよい。昭和四十六年度講義でこの概念が初めて現れ、まだ荒削りではあるが、その本質的特徴が次のように述べられる。

「そこには分析し切れない、割れば必ず余りが生じる、分析しても分析し尽くせない処が必ず残るわけです。閉じた統一のある体系というのはそういうものです。今の場合の統一というのは、全体が一つである、人間の体ならば、体だという全体が一個の存在になっているという事です。そういう場合、全体というのは部分の寄せ集めとして考えられるような全体ではないということです。部分を持ち寄っていくらそれを結び付けても本当の全体にはならないような仕方で全体が一つの統一を成しているという事です。そういう統一にself、すなわち「それ自身」と言われるような意味が現れて来るわけです」(24:154 f.)。

人間の体は、ただ単に部分の寄せ集めによって成立しているのではなく、それらを繋ぎ合せただけでは成立しえない「全体が一個の存在」ないし「一つの統一」を成している、という事態がここでは指摘されている。そういった存在様態に西谷はselfという語をあてる。さしあたって、selfは生きている物の部分を「生きる」という目的へ向けてorganicに統合し、それによって「内に閉じたclosedな体系」として「個物を個物として成り立」たせている、生きているものの「全体の統一」であるといえるであろう。

西谷は、このorganicな統一の存在様態の要素として、「他のものと共通に成り立っているという面」(24:160)[3]を挙げる。これには二つの段階があり、直接的には、生き物が外界と交流しつつ生命を維持していること、具体的にいえば「水とか空気とか食べ物とか、そういうものがなければ生きられない」(24:155)という面、さらに間接的には水や空気、食物を摂取することによって、同じく水や空気、食物を摂取する他の生物と繋がっている側面が挙げられる。selfのorganicな統一においては、単なる物質と異なり、必然的にこのtogetherness(本論では「共在」

と訳す）と言われる様態を見出すことができる。

とはいえ、この昭和四十六年度講義においては、まだself概念は未分化で、egoや「魂」といった概念と対比しつつ概念の画定が試みられているが、どちらもselfの一形態ないし一段階としてとらえられているようである。例えば、selfは普遍的な生に根を持ちつつ、個別化された身体を全体的に統一している自己ともいうべきものであるが、「魂」は「生という事と、それから先程言った純粋なselfという事との中間の段階」（24：158）ともいうべきものであり、「個々の個が一つの世界の中で共通した地盤をもっている、或いは、個々の個がその基礎において、大地にすっかり入り込んで大地の中で他の色々なものと区別なしに、区別以前の処で成り立っているというそういう一面」（24：160）とされる。この言説によれば、selfは個を超えた生一般ともいうべき「大地」に根付いており、そこから由来しているが、「魂」はそこと「純粋なself」との中間段階と位置付けられている。講義が進展していくとselfは、この「魂」も「生一般」も含めたものになっていく。ここでいう「純粋なself」はさしあたって、個別の生命体における生の存在様態であるが、後に議論するselfそのものは個体以前の「生」に根差しており、その「生」の自己限定として個別の生命がある、という着想がすでにこの昭和四十六年講義で現れている。

他方、egoは「selfというものの対自性」（24：156）を指しており、いわば「für sichなself」（24：157）とされる。「egoというのは我の立場の徹底した面」、つまり、「selfの一方の面だけが非常にはっきりとさせられて、他のものと共通に成り立っているという面が隠れたような形」（24：160）とされる。対自的なselfを持ちうるのは人間だけなので、egoは人間における特殊なselfであるといえる。したがって、egoは、空や無我という教えによって仏教が、「自然の世界の中で他のものと切り離せないような形で、自他の区別を超えた形で、成り立っているという面」（24：160）を恢復するために克服すべきselfの在り方である。

いずれにせよ、selfは、「体の中に滲み込んで生きて働いている」、生の在り方そのものであり、「部分を持ち寄っ

ていくらそれを結び付けても本当の全体にはならないような仕方」での全体的な一つの統一である。またself は「魂」と同じように「感覚の主体」としてあることもあり、また、身体という外に晒されているものを介して、自然の世界の中で他のものと切り離せないような形で、自他の区別を超えた形で成り立っている。昭和四十六年度講義におけるself概念の原型はさしあたりこのようなものといえる。

三、「心」と「体」の関係

では、このself概念を基礎として、西谷は「心」と「身体」の関係についてどのように考えるのであろうか。昭和四十九年度講義では、感覚性を心と身体の結節点とみて、感覚は肉体とは切り離せない一方で、「もの」についての広い意味での意識でもあり、心の問題でもある、としたうえで次のように言う。

「「心」というのは、感覚において体と切り離せない、始めから一つになっているという事があるわけです」(24:291, cf. 25:73, 25:415)。

「心」と「体」という二つの別のものをあらかじめ設定して、それの結合を考えるというより、「体のいろいろな働き、感ずる働き、感覚の働きと言われるような事も含めて、非対象的なact、そういう作用との結びつきという事で考えられないかどうか」(24:291)、つまり、「「体」が同時にself・自分だ」(ebd.)ということで考えようとしている。こういった心と体との働きは、「selfという対象化できない事」、あるいは「作用という事」から考えることもできる。働きという事だと、いわゆる「体」の働きと言われるものと「心」の働きが「生きているという事の中で結びつく」(24:292)。self概念はここではact(作用)として考えられ、身体を物理的に動かす場合はもちろんのこと、感覚すなわち「感ずる働き」をも通じて貫いているものとする。つまり、selfは身体内で起こっている生命作用

一般ともいうべきものとして考えられている。

ここで注意すべきことは、self が「非対象的」なもの、「対象化できない事」とされていることである。西谷によれば、直近の昭和四十九年度講義では、この対象化されない在り方こそが「「生き物」の有」(24:300)であり、「存在が存在自身の内部からその存在を保ち、また、展開させる」(ebd. cf. 24:299)という在り方とされる。それゆえ、self は生き物を生き物たらしめているものに対する存在論的な概念であり、それは「体」にも「心」にも区別なく展開されている生命作用そのものである。昭和五十年度講義では、非対象的な act である self が体そのものを滲透しつつ、生き物を生かしている事柄がさらに発展的に次のように語られる。「生物が生物そのものとしてそこで成り立っている処」、生命の「一種の中心のような処」である self は、生物の体という「形有るものの全体の何処にでも行き渡っていて、しかもそれ自身は形をもたない」(24:346)。

そういうものが「生物体の構造」の中に含まれているが、身体はそういった self の「生きている」という「直接の環境」ないし「第一次環境」である。「体というそこの処に生命そのものが端的に現れている」(24:346)が、身体は一面 self が「外からの環境を、いわば刻んで、自分の物にしてしまったような一種の環境」で、身体全体は「一面外的でありながら、同時にその外が内になっている」「内的環境」(24:347)である。つまり「self そのものがそこ〈身体〉へ自分を直接に express している」(24:347)と解釈されている。だから体は「自然界の一面」であり、「形」を持ちつつも、「自己すなわち「自」とか「自性」とか「それ自身」と言われるようなもの、対象化できない本当の「内から」という、そういうもの」(24:347)に属している。また、体という内的環境を媒介として、self は外的環境である自然とも繋がっていることが指摘される。「ここでは、体というものと、それから外の世界と言うか自然界と言われるものと、そういうものが全部一つの繋がりをなして成り立っている」(24:347)。self—身体(内的環境)—自然(外的環境)といった連関まで見渡して初めて「生きているという在り方の構造」(24:348)が

考えられるのである。

四、世界全体を映す身体—「局所性（locality）」の概念

この身体をself の内的環境と捉える問題は、昭和五十三年度講義でさらに展開され、self と世界全体との関係の問題へ展開され、次のようにいわれる。「体というのは、内的環境ですが、生物にとっての外的環境、体を取り巻いている環境を延ばして行くと、全世界、宇宙というところまで広がっていく」（25：156）。

身体はこのような自然界の中の一つの物として存在しているが、同時に外界と自分との間に一つの線というか枠を持った物として生きている。「生きるという働き、或いは生命という事から言うと、身体というのは外界に属していながら、同時に外界ではない」。これを仮に内的環境といっているが、内的環境と外的環境には交通がある。その交通を仕切り、交流の場になっているのが「皮膜」である（25：156, cf. 25：223）。皮膜によって内と外が仕切られるが、「そこで、もう一歩進めて言うと、そこに生き物の全体性が現われているということです。つまり働きという事が成り立っているということですね。もう一つ遡ると、体が一つの全体だというのは、前から言っているように、そこに宇宙全体、或いは世界全体が自分を写している、そういう姿なんだというようなことですね」（25：157）。身体は、self が世界全体からそれ自身を個別化しつつも、世界との交流という働きによって、その働きの呼応から世界全体を映す場でもある。逆からいえば、生きているという「働きそのものに一個の生き物であるという事の全体性が現われている。それが身体的であるということの意味」（25：158）であり、またそこに「世界が全体性として映っている。換言すれば、そこに〈世界が〉自分自身を現わしている、現われている」（25：160）。

身体において世界の全体性が映されている、というこの論点は、昭和五十六年度の講義において、「局所性（local-

ity)」の問題へと洗練される。[4]「局所性」の問題意識の端緒は、すでに昭和四十九年度講義に見られる。ある存在は、他の色々な存在との繋がりの上で、しかも、その繋がりは何らかの意味で「自然界という全体の中で決まってくることだから、そういう何らかの意味の世界、そして、その世界というのは他の事物との繋がりの上に現れていて、その繋がりの上でその「もの」が成り立っている、そういう存在と存在との関係の間の中で、その「もの」は一つの所を得ている、所を持っている」(24:304)。ここでは、「局所性」に展開される事態が「所を得る」という語で表現されている。「何か「もの」が有るということは、やはり、そういう自分の存在の場ないし所というものが、他の色々な「もの」との繋がりの中で成り立っているという事、そこで有らしめられているという事」(24:304)として考えられている。単純な空間の中にある、というのではなく、昭和五十年度講義の華厳的な言葉でいえば、「すべてのものの相依相入」(24:335)、「お互いに支え合って、存在そのものの中に他のものの存在が映されているとか、represent されている」(24:336)という仕方での在り方である。

この「所を得る」という問題は、「身体の空間性」という意味においての「局所性」という表現に言いかえられていく(cf. 25:266)。「局所」というのは、外的環境から区別されるような個体としての固有な空間性で、身体の空間性のことであり、身体が今ここに有る、という事である。ただ、この「生きている」ということが持つ「局所性」とは、物質(例えば石ころ)がゴロゴロと箱の中に並んでいるという「存在の形」とは異なる。外的環境とは区別されつつも、「一つ一つの「もの」は全体を担っている、全体を映している」(25:266)という在り方である。

五、世界全体が映る場としての「感覚性」

昭和五十六年度講義においては、この「局所性(locality)」の着想は、「感覚性」の問題と結びつけられる。「local-

ity が locality としてAの内に現れて来るということ、その事が、AならAという生物が感覚を持つということなんですね」(25：422)。局所性と感覚性が呼応することはやや唐突ではあるが、この着想は非常に重要な意味を持っている。生きているものは「局所性」という在り方で世界全体と互いに映し合っているとされるが、この現象を対象的に見るのではなく、ある個体が生きているということの過程でどのようにそれが実現しているのかということを考えれば、まさに内的環境としての身体と外的環境との結節点である感覚性の問題になってくる。身体は「世界全体の開けの局所」(25：423)であり、感覚性を通じて、生きているものは、外の世界とともに、外の世界に感応する自分を感覚として受ける。生きているものの「存在の根本構造に感覚性」が結び付いている。この事態は端的に次のように語られる。「感覚というものは、外の物との関係の上に成り立つものですね。しかし同時に、それは、其の関係がA自身の中に反映して、AがA自身の内に自分を映すという形で成り立つわけですね」(25：422)。

つまり、外の物を感覚するという事柄のうちに、同時に外の物と自分との関係性も感じ取られ、そこに自分を含めた世界全体が映しだされる。この外の物と自分との関係性は、Aに外の物を受け取るという能動性があることによって、感覚される。この事態は次のように語られる。「外からの働きかけがAに受け取られる。そして、Aに受け取られるという事、言い換えると、Aがそれを受け取るという事の中に、Aの能動性が含まれている」(25：423)。感覚には、外の物との「受動能動という関係」が成立しており、その能動性（どのように受け取るか）の過程を、西谷は昭和五十三年度講義で詳しく分析している。

「感覚というのはどういう事かと言うと、明らかに外のものが内へ impress する、内が外のものによって impress される、外の物が力を内まで押し込む、そういう impression という事ですね。（中略）impression というのは、どういう事かと言うと、これはやはり内から出る力が抵抗して、外からの力によって跳ね返されて、中心に向かって押し返されてくる事によってだと言えますね」(25：181, cf. 25：180 f.)。

三一

感覚の根源、あるいは生きているということの根底には、「衝動的な一種の力」(25:172)があり、それが外の物とぶつかる境の一つが感覚性であり、外の物を感じるとともに、常にその反作用としての自分を知り、また自分の内の生の力を知ることになる。西谷によれば、この生きていることの根底にある力は感覚だけに作用するのではない。生きているもののそれぞれの種が持つ構造も、この力と外的環境とのせめぎあいのなかで構成されている。例えば、花というものの構造は、「内から出た力が何か抵抗にぶつかると、その時に、その抵抗を感じたものが内へ跳ね返ってくる。内への振動と言うか、その働きが内へ反響する。(中略)そういう一種の反響というものが花なら花というものの構造を形成するというふうにも考えられる」(25:180 f.)花の咲こうという力がまずあって、それが外的環境とのせめぎあいから花の構造を形成していく。

こういったself の持つ力は、昭和五十一年度講義では、周りの世界と繋がりつつ「生物自身が自分の中から展開してくるact」(25:15)と規定されており、「「生きている力は、自分が生きてやろうと思って自分で獲得したとか、一つこういう力をどっかから取り寄せてこようとか、そういうものではない。(中略)生き物が自分で自分の内から生きるという場合に、そういう在り方自身がどうして成り立ちうるのかと言えば、それは一番根本の処、origin というか、一番源の処では自分の力によってとは言えないという、そういう処があるわけですね。つまりそういう風に自分の力でしか生きられないという在り方が自分に与えられている」(25:16, cf. 24:378, 25:15, 25:263, 26:219)とされ、self の淵源がなんらかの力によって生かされていることが示唆されていた。しかし、この昭和五十三年度講義では、この力はさしあたって、個体自身の内からの力でありつつも、同時に種的な力でもあり、さらに、「種と種とを結ぶ背後」の「全体を包む生命」でもありうることが明確に述べられる。「逆にそういう大きな生命というものが有って、それが段々人間にまで限定されて来て、それが又個体の生命として独立するということが言える」(25:182, cf. 25:263)。種としての花の構造、さらに人間の身体というものはこのような大きな生命の自己限定で

あり、「外から来る太陽や何か、そういう外から来る働きと呼応し合ってと言うか、応え合っている」(25:183)。

そして、昭和五十四年度講義では「存在する「もの」が自分の存在をあくまで維持して行く、存在が自分自身を維持して行くその力、それはそのもの自身の内部に、先程言った泉のように、その力の源がそれ自身の内部、存在そのものの内部にあるという事」(25:221, cf. 25:174) とまとめられている。

いずれにせよ、self は、「生物自身の内部から発動して来る衝動的な一種の力」であり、内からの条件の一番基本的なものである「種」を因として、また、環境とのやりとりを縁として (cf. 25:177) 個体としての身体を形成する。身体は、内部から泉のように発動する力によって、外からの抵抗にぶつかりながら、種としての形と結び付きながらも、その形を絶えず破っていく、という仕方で自分の存在を維持する (cf. 25:174)。この力については、西谷は、やや神秘的に「全体を包む生命」、「大いなる生命」と表現している。

ところで、self を背後から支え生かしているこの「生命」とはどのようなものと考えればよいであろうか。「生かされている」という事柄の根本は、「生命というのは、自分が自らを維持し生きて行くという事」(25:17) であり、その生命を生かすものは、「個々の生物の中に一つの中心みたいなものがあって、その中心からの力とでもいうふうなものが発動している」(25:174) としている。ここでは抽象的な生命一般が考えられているのではなく、現実の個々の生物の中から発動する生きる力そのものが考えられている。ただ、それは、「生きているという事の根本の力」である「生むという事」(25:178) によって伝えられていく、ともされているので、最初の生命のところにまで遡ることができるであろう。しかし、self が存在論的な概念であるとするならば、その核心であるところの「生命」も存在論的に考えねばならないであろう。「生む」ことによる「力」の伝達という物理的な現象との存在論的な差異をどのように考えればよいであろうか。この点において、西谷の「大いなる生命」の概念にはまだ不明瞭なところが残っている。

六、身体と超越性の問題—「土」の概念を介して

さて、以上のself概念を踏まえたうえで、西谷は更に身体を「土」という概念でとらえ直そうとする。そして、この「土」の概念を媒介として、身体と超越性ないし宗教性の問題を考察しようとする。

西谷は、昭和五十一年度講義で、身体ないしselfの問題のうちで、「生きているという事が、生かされて成り立っている、背後から生かされて成り立っているという、そういう存在の構造」(25:18)を「土という問題」として考えようと試みる(cf. 25:17 f.)。「土」の概念は、昭和四十七年度講義から西谷の問題意識の中にあったようである。その基本的なモチーフは次のようなものである。一人一人は身体を単位として個体、個人になる。いわば、身体は個体化の原理である。ところが、個体は身体を媒介にして、呼吸することや水を飲むことにおいて「大きな自然の中へすっかり嵌めこまれて」(24:246)、自然や他の生き物によって生かされている。それを象徴する言葉が「土(ど)」であり、身体はそのような構造としての「土」に根付いている。昭和五十一年度講義では、自然ないし世界全体に根差しつつ、「人間が体を持って、或いは体として、身体として、そこに存在しているその場が土ということの一番根本的な理解の仕方」(25:8 f.)であり、「生きているという存在の構造の中に入ってくる要素」(25:18)とされる。それは「生きているものの存在している場」(25:21)ということで、抽象的に言えば「共在」(togetherness)としての「存在の空間性」(25:21)である。

この「土」としての「場」は、生き物の存立基盤というにとどまらず、その存在構造の一部をなしており、存在論的な問題として捉えられている。「有る物は必ず場を持つ。場という概念が、だから有るという事自身の構造の中に属している」(25:33 cf. 25:35, 25:38, 26:4)。要するに、「土」とは「有るものが存在するという時には、何時で

も場と結びついて、或る場を占めて、存在して来る」という「存在の理法」である。

「土」の問題は、本質的には、今まで確認したself の「共在」(togetherness) の問題と重畳するが、西谷はあえて、「土」と言い換えることで、身体と社会、政治ということに加えて、超越性との関係の問題を論じようとする。つまり、「土」という概念から「仏の国土とか神の国とかいう問題」(25:46) が出て来る。[5] 超越的な次元は、此岸における身体と切り離されたものではなく、「現在我々が生きているという、その事の根本に含まれている問題だといっていい」(25:135 f)。この事を含意して、「土」ないし「身土」という概念が注目されている。それゆえ、西谷の身心論は究極的には、「土」としての超越性の問題の「手掛かり」(25:47) として考える意味を持つ。

では、身体論における「土」の概念はどのようにして超越性の問題へと繋がっていくのであろうか。[6] 昭和五十三年度と昭和五十四年度講義において、この問題について詳しく言及されている。西谷によれば、「生きている」こととしてのself は、「土」ないし「場」としての身体性を介して、存在論的に「超越的なもの」、「超越的な次元というか、超越的な世界と結びついている」(25:131)。この超越的な世界というのは「この世界とは違った世界」であるが、やはり、それは「或るものが世界の内に有るという、そういう事の根本構造の問題」として捉えるべきであるとする。端的にいえば、自覚的存在である人間が、根本的に死を考えた場合、「今生きているという事の中に、前の世とか後の世と言われる次元と言うか世界が、本質的に結びついていること」(25:133) が自覚される。我という存在を見る人間の視線は地平的であり、「無限な広がりが、しかも境目を持って現れている」(25:279)。限定をもった自分の生とその場所である身体としての「此の世」を考えたときに、どうしても「彼の世」との境目が問題となってくる。「生まれる前の世とか死んだ後の世は「彼の世」であるという観念が出てくる」(25:280)。「死の問題は、何らかの意味で超越の次元といった問題を呼び起こす」(25:132)。

もっとも、超越の次元や永遠の世界を考えることは、この世界を超えるということであるが、そこには、前後や後

先、彼此といった時間的空間的な表象がすでに入ってくる。しかし、それだけでは超越的な世界を捉えられない。なぜなら、永遠というのは、時間と空間を超えているからである。それを本当に考えるのにはどうすればよいか、ということが問題になる。そこで、現在の身体を介した「土（ど）」、神の国、浄土、仏国土の土が問題となる。神の国というのは、「神との結び付きというものが、人間の存在の中にハッキリ立てられている処」（25：134）、信仰によって開かれる場所であり、「超越的なもの、神や仏というものとの結び付きが人間の在り方自身の中に実現されてきたという意味」（25：135）を示唆している。むしろ人間の存在が、そういう結び付きを含んだものになってきたと言ってもいいし、それは「本来それであるはずのもの、本来の在り方に立ち戻った」という見方も出来る。とすれば、神の国や仏国土というのは、現在の問題でもあり、この世の問題でもあり、また人間の住む世界というこの世の世界の根底を映したものになる。

では、これらの論点の連関をどのように考えればよいであろうか。此岸において人間は、「自覚をもった存在」であり、「われ有り」という意識を持つ。その「われ有り」を掘り下げて行くと、上に見たように「無限な広がりが、しかも、境目を持って現れて」（25：279）くる。「此の世」の境とともに「彼の世」の地平が現れ、彼の世の神とか仏とかという色々な問題が現れてくる。ただこの地平は、「絶えず何処まで行っても限界があって、限界は何処まで行ってもその彼方」（25：282）という性格を含んできて、「われ有り」という人間の存在の根本に含まれる問題を呈示する。つまり、「われ有り」には限界があり、その根本に空無性がある、ということが自覚されてくる。「「われ有り」などという事は全く根拠の無い事として自覚されてくる」（25：281）。そこから翻って、あらためて「自性」という事が問題になってくる。「土」の概念によれば、生き物は個であって、他の物と絶対に代わることが出来ない。しかし、同時にその個に「世界が全体性として映っている」、換言すれば「そこに〈世界が〉自分自身を現わしている」（25：160）。それゆえ、「自性という事を徹底すると、それは世界と一つだから、つまり全体性としての世界が

そこに映っているという事だから、自性は同時に無自性だということになります。世界という立場を空という場合、しかし同時にそれが無自性空だというのは、それが個々の事象、事々物々の事象の根本である。自性は、根本的に無自性」（25：162）である。

こうして「身土」のレベルで捉えられる「浄土」や「神の国」は、「我有り」の否定契機として現前する。「世界の開け」を対象的な世界としてではなしに、「自性というか自の世界」そのものの中に入って見てみる。そうすると「そのもの自性、自然（じねん）の世界に自分自身も入って見る世界」は無自性であり、空である、という意味での世界の超越性が自覚されてくる。「我有り」と自覚するself の作用そのものが、生かされてあるということ、そして、世界全体を映しつつself が作用しているということ、この意味において、「我」が「我」を超越したものによってあらしめられていることが自覚されてくる。self の持つ「土」という在り方そのものに「我」を超える契機が含まれているのである。したがって、西谷は明確に次のようにいう。「人間が存在している世界というものの根本は、宗教的であると言っていい」（25：136）。

本論は、冒頭に示した長谷氏の指摘に基づいて西谷の身体論と「空」の思想の関連を推測したが、このように西谷において身体の問題は、究極的には、仏土や神の国といった超越的次元の問題、宗教的な次元の問題へと、さらには「無自性」や「空」の問題との必然的連関をもっていることが明らかになった。

註

（1）『西谷啓治著作集』、第二十五巻『大谷大学講義Ⅱ』、創文社、一九九二年、「月報」一ページ。

（2）本論では、西谷啓治著作集からの引用は、略記号（巻数：頁数）で表示する。用いた著作は、いずれも創文社刊、『西谷啓治著作集』、第二十四巻『大谷大学講義Ⅰ』一九九一年、第二十五巻『大谷大学講義Ⅱ』一九九二年、第二十六巻『大谷大学講義Ⅲ』一九九五年。

（3）西谷はここの箇所では self と「逆の面」（24：155）ともいっている。純粋に物理的な過程として科学的に観察すれば、そのようなことにもなりうる。

（4）「空間性」と「局所性」の違いについては、物質と有機体（「個体としての生物とそれを取り巻く世界とが切り離せない」）との違いが反映されており、昭和五十四年度講義第十四講（25：265, 25：269, 25：386）参照。「局所性」は「ところ」、「有の開け」とも言い換えられる（cf. 25：413）。togetherness の問題は結局は「一即多、多即一」の問題として捉えられる（cf. 25：404 ff.）。

（5）すでに昭和四十八年度講義において、生と死という事の一番の基本の事として「土」が考えている。この問題は、宗教的な次元においては、穢土、仏土、仏国土、神の国といった概念と直結している（cf. 24：242）。self の人間における自意識な側面を強調すると、純粋な体を超えた ego の問題になるが、「体にとっては土に還る、土という言葉で死が考えられていたのに対して、ego という事を問題にすると、これはやはり空に帰する、無に帰する、すっかり無くなってしまうという事が出て来る」（24：242）。したがって、「死という問題は、人間の存在の場合には、生物としては土という問題、それから自我という問題では、空という問題になる」（24：243）ただ、宗教的な意味においては、「生とか死とかという事を絶対に越えるという、そういう面がどうしても要求される」（24：245）。「土とか、それをもっと深めた虚無とか無」を考え、「体という事とか、ego という事を越え出るという立場」が宗教的な意味の死を考える立場とされ、表現は違うが、やはり「土」に戻ることによって、仏土や神の国に繋がることが思念されている。

（6）昭和五十一年度講義では、身土の問題、すなわち人間の存在の場の問題は、裾野では、有りとあらゆるものの存在の場という問題にまで広がり、「頂点では仏の国という、そういう問題にまで結びついてくる」（25：47）とされる。なぜなら「仏の国というのは、人間の有るべき在り方の一番の究極の処という意味を同時に持っている」（ebd.）からである。しかし、この講義での身土と仏国土の関係の問題は、「死」や「我」の問題を媒介としていないがゆえにまだ、荒削りである。